［劇評］

車椅子にのった国王
～リリック・シアター『リチャード三世』

北　村　紗　衣

2024年10月12日から11月10日にかけて、ベルファストのリリック・シアターにて『リチャード三世』が上演された。この作品は演出家のオシーン・カーニーと主演もつとめているマイケル・パトリックがウィリアム・シェイクスピアの『リチャード三世』を翻案したものである。パトリックとザック・フォード＝ウィリアムズが交代でタイトルロールのリチャード三世を演じている。本劇評は11月10日にフォード＝ウィリアムズがリチャードを演じたマチネ公演を対象とするものである。

「翻案」とは題しているが、シェイクスピア上演としてはそこまで大きな変更を加えた台本ではないと考えられる。テクストが刈り込まれて短くなっていたり、登場人物の数が少なくなっていたり、エリザベス王妃が夫の死亡時に妊娠中であるという設定になっていたりするといった変更があるが、基本的な筋はあまりシェイクスピアの台本から解離していない。できるだけシンプルに少ない人数で上演することを目指している台本であり、エドワード王や小さな王太子は役者ではなく、ボール紙などで作った人型に冠をかぶせるというやり方で象徴的に表現している。

本プロダクションの大きな特徴のひとつは、リチャード役が車椅子ユーザの俳優によって演じられているということである。主演のひとりであるパトリックはベルファスト出身で既にキャリアのある俳優であったが、近年になってから運動ニューロン疾患を患い、車椅子を使い始めた。2023年7月にインスタグラムで自らの病気のことを公開し、今後はこんな役柄を演じたい…とリチャード三世を

含めて障害のある役柄を列挙したところ、リリック・シアターから連絡があって今回のプロダクションを制作することになり、台本段階から本格的にかかわることとなった。もうひとりのリチャード役であるフォード＝ウィリアムズは脳性麻痺を患っている若手の男優で、Netflix の配信ドラマである『ブリジャートン家』第3シーズンでは19世紀式の車椅子にのったレミントン卿を演じていた。既に実績のあるベテランと注目され始めている若手でいずれも障害のある俳優をタイトルロールに起用しているということになる。

障害があるキャラクターが主要な登場人物として登場する舞台劇としては、『リチャード三世』はおそらく最も頻繁に上演される作品のひとつである。もとの戯曲のリチャードは車椅子は使用していないが、身体に障害があることは明確にされている。伝統的にリチャード三世の役柄は障害のない俳優が脚を引きずるような演技をすることで表現されてきたが、近年では実際に障害を有する俳優を起用しようという動きが高まっている。これまでは障害を抱えて暮らしている人々にとって演劇界でのキャリアはほとんど開かれておらず、脚の切断後も俳優業を継続したサラ・ベルナールのようなわずかな例外を除いて、障害のある役者が大きな役柄を演じられる機会は少なかった。『リチャード三世』のような演目で障害のある俳優が起用されるようになったのは、こうした雇用機会の不平等を是正するための試みである一方、新たな才能の発見・流入にもつながっている。

一方で『リチャード三世』は障害の表象という点で問題も抱えている。リチャードは障害のせいで容姿が劣っているという描写があり、悪辣な企みを繰り返す野心家でもある。演出によっては、『リチャード三世』は障害のある人物は心身ともに醜いという差別的なステレオタイプを強化してしまう可能性がある。

本プロダクションは演出・演技によってそうした既存のステレオタイプを強化するような表現を回避していたと言える。フォード＝ウィリアムズ演じるリチャードは、とくに序盤では非常に真面目で、言ってみれば優等生的な人物である。このプロダクションは権力闘争に勝利したヨーク家の面々が乱痴気騒ぎをしているところから始まるが、リチャードはこうしたパーティを楽しむのもあまり得意ではなさそうな大人しそうな青年だ。リチャード役は通常、ぎらぎらとした

野心とどぎついカリスマ性に満ちた役柄として演じられることも多いが、フォード＝ウィリアムズの役柄には全くそうしたところがなく、むしろこつこつと人知れず努力を積み重ねるようなキャラクターに見える。独白にも芝居がかかったところはなく、ただ成功や出世を目指して無心に頑張っている若者のように悪気のない口ぶりで観客に話しかける。

ところがフォード＝ウィリアムズのリチャードは、自らの優秀さを簡単には周囲に認めてもらえない。通常、リチャード三世は障害を抱えつつもエネルギッシュに活動する軍人として演じられることが多いが、このプロダクションでは落ち着いていてあまり体力がない人物として提示されている。穏やかな話し方をするリチャードは、障害やこの体力のなさゆえ、なんとなくまわりの人々から軽んじられ、能力があっても真剣に受け取られていないように見える。いくら努力しても思うように出世できないリチャードは、正攻法では障害のある自分は成功できないと考え、真面目な努力の一環として悪事に手を染めるようになる。

こうしたリチャードの腹心となるティレルは、このプロダクションでは聾者であり、イギリス手話を使用している女優ポーラ・クラークによって演じられている。ティレルの役割は原作に比べてはるかに大きくなっており、序盤からつぎはぎの道化師のような服装を着て登場する。リチャードが王位につくのを手助けする重要なサポーターであり、ある種の狂言回しでもあるというような機能を果たしている。リチャードとティレルは、形は違っても障害があって軽んじられている者同士として独特な信頼関係を築いており、このふたりのやりとりからはコミカルな親しみが感じられる。

このように障害のある役者が複数出演しているため、セットデザインにも工夫が見られることは言及すべきであろう。ナイル・マキーヴァーが担当しているセットはシンプルで、城の形の大きなついたてやゴミ箱などを必要に応じてセットの全面に動かし、場面設定を変更するという形になっている。手話を使用している俳優がいることもあって視界を遮るものが少なく、また車椅子が動きやすいよう、使えるスペースも広い。

終盤では国王となったリチャードの体調がストレスもあってどんどん悪化する

という演出があり、車椅子と一緒に酸素吸入器を持って移動しなければならなくなるので、広いスペースでつらそうに咳き込み、酸素を吸い込むリチャードの孤独な姿が引き立つようになっている。リチャードの最後は、戦闘中に殺されたというよりは戦いの消耗によって息絶えてしまったかのように演出されている。ふとしたことから急に体調が悪化し、場合によっては死と隣り合わせの状況になってしまうというこの描写は、病や障害を抱えている人々の不安な状況をリアルに表現していると言ってよいであろう。

リリック・シアターの『リチャード三世』は、シェイクスピア劇において障害をどのように表現するかという点で非常に効果的な演出を行っていると言える。障害のある役者たちがプロダクションの準備時点から本格的にかかわることにより、新しく興味深い上演が生み出される可能性を示している。今後、このような障害のある役者を雇用したプロダクションはどんどん増えていくと考えられるが、舞台のデザインなども含めて後世の上演が参考にすべきプロダクションであると言えるであろう。

※本劇評はJSPS科研費JP23K00410の助成を受けた研究の成果である。

参考資料

Michael Patrick (michaelpatrick314), Instagram post, 7 July 2023, https://www.instagram.com/p/CuZ8Ns6o9fl.